

第 32 回ウラル学会研究大会研究発表要旨

フィンランド語の非定形動詞における主語標示について 時相構文・分詞構文の分析を中心に

坂田晴奈 (東京外国語大学大学院)

本研究におけるフィンランド語の非定形動詞とは、複文の従属節中の不定詞や分詞を指す。非定形動詞の意味上の主語を標示する構造としては、Dependent-Marking (以下 DM)、Head-Marking (以下 HM)、Double-Marking (以下 DBM) の 3 つが考えられる。Sakuma (1998) によると、時相構文の従属節における主語標示は所有表現の構造にほぼ対応している。主語が人称代名詞以外であれば DM であり、人称代名詞の場合、1、2 人称であれば HM (所有者を強調する場合は DBM)、3 人称で主節の主語と従属節の主語が一致していれば HM、一致していなければ DBM になる。

一方分詞構文の場合は条件が異なる。従属節の主語が人称代名詞以外の場合は時相構文と同じく DM である。しかし人称代名詞の場合、単に主節の主語が一致していれば HM、一致していなければ DM となり、DBM の構造は用いられない。このように条件が異なる理由として、Sakuma (1998) は両者の統語的特性の違いを指摘している。

本研究ではフィンランド学術コンピュータセンターの Kielipankki 中にある、Demari が 2000 年に掲載した記事をデータに用いて分析した。総語数は約 66 万語、記事の総数は 2195 である。検索のキーワードは、時相構文に用いられる非定形動詞と、荻島 (1992) にある分詞構文の主節に多く用いられる他動詞である。

時相構文の例は 1649 例見られ、そのうち 1205 例 (73.1%) が DM、432 例 (26.2%) が HM、12 例 (0.7%) が DBM であった。DM の例はほとんど従属節の主語が人称代名詞以外であったが、2 例のみ人称代名詞を主語としていた。この 2 例は先行研究の指摘と矛盾する。これらはいずれも主節が受動態で、主節の行為者が不特定であった。

さらに、荻島 (1992) にあった他動詞を主節に持つ分詞構文は 1013 例見られた。このうち 332 例 (32.8%) が DM、451 例 (44.5%) が HM の構造を取るものであった。残りの 230 例 (22.7%) は主語標示の構造が DM でも HM でもなかった。まず、2 例は従属節の主語が分格であった。そして 213 例は従属節の主語が標示されておらず、これらの多くは主節が受動態である。さらに、15 例は従属節が存在文の構造を取っていた。本研究における両構文の分析を通じて言えるのは、主節が受動態である場合は従属節の主語が原則通りに標示されない例が多いということである。

フィンランド語の使役構文における無生物項の解釈について

千葉庄寿 (麗澤大学)

フィンランド語には、使役を表す構文形態として、a) 語彙的な使役動詞を用いるもの【語彙的使役】 b) 生産的な形態論のプロセスにより派生される使役動詞を用いるもの【形態的使役】 c) 補文要素を用いて使役を分析的に表すもの【統語的使役】の3種類がある。c) の【統語的使役】の場合、被使役者は主動詞の目的語として、また補文の主語は第3不定詞入格形の形として現れる。

このように形式の異なる使役構文を共通の枠組みで捉え、それらの用法上の特徴を比較分析するには、使役者項 / 被使役者項の有生性、補文要素の動詞の種類など、複数のパラメータを複合的に分析することが考えられる。それには、一次資料として言語コーパスを大規模に導入し、実例に基づいた数量的な比較をおこなうことが不可欠である。

本研究では、フィンランド語の言語コーパス(フィンランド学術計算センターCSC 所蔵の「フィンランド語バンク」)に収録されているフィンランド語の週刊誌のテキストデータ(約120万語)を一次資料として用い、各種使役構文の用例を収集し、使役構文が実際に用いられる語彙的なパターンを複数のパラメータに基づき集計し、構文間の比較を試みた。発表では、構文に現れる主語(使役者項)の有生性を例に、用例を数量的に分析して構文間の比較を行い、以下の点を指摘した。

- ・使役者項に有生名詞が現れる比率は形態的使役のほうが高く、無生の主語は「原因」としての意味を担っているか、擬人的に用いられている用例であると解釈できる。
- ・統語的使役では無生の使役者が20%以上出現するが、無生名詞句が主語となりうるかどうかは動詞の種類によって大きく異なる。

これらの分析結果に基づき、本発表では、フィンランド語の使役構文が「無生の使役者項の比率が高ければ、その構文は直接使役の意味をもつ」という Kemmer & Verhagen (1994) の分析にほぼ沿った結果を示すことを論じた。

今後、被使役者項の有生性の分析、さらには使役者項と被使役者項の有生性の分布のクロス集計をおこない、さらに補文要素に現れる動詞の種類や構文の構成要素の語順といったパラメータを加味し、より詳細に用法の記述を進める予定である。今後、各パラメータの利用がどの程度有効かを今後検証していくことで、単一言語内での構文の比較にとどまらず、言語横断的に使役構文を分析する際にも、本研究の分析結果が有意義な検討材料を提供することが期待される。

ハンガリー語の結果状態を意味する表現について

大島 一 (一橋大学大学院)

ハンガリー語において結果状態を示すものには「副動詞構文」がある。副動詞構文とは、副動詞(動詞語幹 + -va/-ve「～しながら」)に存在動詞 *van* を組み合わせた形式をとる。しかし、ある動詞ではこの副動詞構文を形成できず、その代わりに単純動詞過去形で結果状態を含意させるものがある。本発表では副動詞構文の形式及び意味用法的観察から、この反例ともいべき動詞が副動詞構文に対してどのような位置づけであるかを明確にした。

観察では変化動詞である *nyit*「開ける」や *zár*「閉める」のような動詞に注目した。これらの動詞からは副動詞構文が形成できるが、*meg-hal*「死ぬ」といったものからは副動詞構文が形成できない事を実際の文例をもとに指摘した。

この違いは、同じ変化動詞の中でも前者の動詞は可逆性をもつのに対し、後者にはそれがあり得ない(= 不可逆性)という語彙的特徴に依存するという事実からくるものであると主張した。

すなわち、*nyit*「開ける」や *zár*「閉める」のような変化動詞では上記の副動詞構文の形式(副動詞 + 存在動詞 *van*)における存在動詞 *van* の代わりに *marad*「残っている」や *tart*「続けている」という状態持続を表す動詞を使用することが出来るからである。つまり、*nyit*「開ける」や *zár*「閉める」のような変化動詞は、*nyit-va marad* / *tart*「開いたままである」、*zár-va marad* / *tart*「閉まったままである」で示されるように、「～したままである」という意味で使うことができる。これに対して、*meg-hal*「死ぬ」のような変化動詞は「死んだままである (**meg marad hal-va*)」とは言えない。「死ぬ」という行為は生きている段階から死んだ段階への瞬間的な変化事象であり、この変化(生 死)を経ることが「死ぬ」という動詞内容を意味する。よって、死んだ後にこの変化(生 死)が繰り返されることは論理的に困難であり(= 不可逆的)、このことが結果状態(持続)を表す副動詞構文を作れない理由であると思われる。

従って、変化前の段階に戻ることが限りなく不可能と思われるような変化動詞では副動詞構文を形成できないことが分かった。そのような動詞において、動作変化後の結果状態を示す場合には単純動詞過去形が使用され、結果状態を含意させることができると考えられる。

日本人及びフィンランド人英語学習者の英語情動の認知と音響特性相関

伊勢井ヤーッコラ・敏子 (東京大学)

情動研究のアプローチには、心理学(心理音響)、音響学(物理音響)、音声学(生理音響)や社会言語学などがあるが、これらは生成面だけの分析と、生成・知覚両面から比較したのものがある。心理学では異文化を超えて情動が普遍である、という一方、文化的差異が出た、という結果もある。また、音響面では、F0 が情動と関係しているという結果が出ているが、音声の音響特性と認知テストのほぼ完全な相関は出ていない。他方、教育面(言語習得)から題材(情動)の効果がどうであるかの視点から扱われたものがほとんどない。更に、英語情動について、日本語母語話者とフィンランド語母語話者の英語学習者を扱った研究はない。

本研究では、異文化間比較を目的にした情動認知テスト結果と音響特性に相関があるかを見ようと試みた。(1)中間言語としてさまざまな情動を含んだ英語短文が日本人及びフィンランド人英語学習者にとって、共通に認知されるのか、あるいは文化的拘束を持って認知されるか、また、英語母語話者と比較して認知差があるか、(2)音だけを聞いた時(audio = A)と顔の表情を伴った(audio-visual = AV)時とで差異が出るか、(3)認知実験結果と音響分析に相関があるか、を検証した。

実験方法は、英語母語話者が“This is a pen”という文を9つの情動: ‘happiness’, ‘(cold) anger’, ‘suspicion’, ‘surprise’, ‘sadness’, ‘fear’, ‘hatred’, ‘disappointment’, と ‘contempt’で各2回発話したものを音声とビデオで同時録音した。その2つの実験材料に対し、フィンランド人(= FL2、2グループ: A 40人, AV 31人)と日本人(= JL2、2グループ: A 149人, AV 110人)の大学生、および、英語母語話者(= EL1、34人)が9つの選択肢から一つだけ正答を選ぶという方法を取った。

結果について、認知テストの全体正答率では、3言語話者について、すべてAV効果の方がA効果より高かった。AについてはFL2が一番低く(20%)、次にEL1(31%)、JL2(38%)と続いた。一方、AVについては、EL1(59%)が一番高く、次にFL2(58%)、JL2が一番低かった(47%)。また、情動語による正答率のパターンはJL2とEL1は比較的似ていたが、FL2ではパラ言語情報の Negative emotions について回答率が前者二者より高かった。正答率の分布には言語間である程度差が出た。次に、Informantの声の音響特性については、感情のないものより、感情のある方がすべて(F0 mean, F0 max, F0 min, dB mean,)高かった。これは日本語とは違つかもしいない。各情動語によってF0曲線やintensity曲線にはパターンが見られた。‘happiness’と‘surprise’はF0曲線が良く似ていて、また、intensity曲線も僅かな差しかなかった。これが原因でこれら2情動の混同が生じたかもしない。‘contempt’と‘suspicion’も同様と言えるかもしない。更に、認知テストと音響相関では、ピッチ(F0 mean, F0 max, F0 min), パワー(intensity = dB mean), 長さ(ms), voicebreaks (%), unvoiced ratio (%)で比較したが、3言語の認知テストのパターンと各音響特性の相関は見出せなかった。

本研究は初期段階であるが、情動認知は3言語話者について、情動の種類により文化差が出る場合とそうでない場合がある、ということが分かった。今回の認知テスト結果は、ビデ

オでの教育は音声だけより有効であるということを示唆している。学習者の弱点を補強するための資料となりうるであろう。しかし、認知テストについては更に詳細な統計的検証が必要である。認知テストと音響特性の相関についても、パラメータごとに抽出するなど方法を変えて再度検証していく必要がある。

戦争の記憶 フィンランドにおける戦争記念碑

杉藤真木子 (名古屋大学大学院)

歴史学や地理学、あるいは人類学などの社会科学の諸分野で、近代国民国家における「国民化」過程を考察する際に記念碑、特に戦争記念碑は格好の分析対象となっている。戦争体験はネイションに属する人々全員が蒙る災厄であるがゆえに、その記憶は容易に多くの人々によって共有される神話へと転化し、その神話が語る理想や教訓は次の世代へと引き継がれてゆくことになるが、共同体の人々によって計画・施工・維持される戦争記念碑は、そうした「戦争体験の神話」成立にとって不可欠の装置であり、その神話を基盤に成立する「想像の共同体としてのネイション」を可視化する場として重要な意味を持っていると言えるであろう。

フィンランドにおける戦争記念碑 *sotamuistomerkki* の歴史は、他のヨーロッパ諸国と同様 19 世紀後半のナショナリズム高揚期に始まり、内戦期に形式が整えられ、対ソ戦争期を経て現在に至る。フィンランドにおける戦争の記憶を語る景観として、英霊墓地 *kaatuneiden sankarihautausmaa* は特に重要な意味を持つ。整然と並ぶ墓石のひとつひとつに戦没兵士の名を刻み、美しい花を植え、彫像を飾った英霊墓地はほぼすべてのコミュニティに整備されているが、人々は祝祭日や個人の記念日のたびにここを訪れ、身近な戦死者を追悼することで彼らが命を捧げた「国家」を意識することになるであろう。対ソ戦争の戦死者のみならず、1918 年の内戦のすべての犠牲者も白衛軍か赤衛軍かを問わず葬られた英霊墓地の景観は、「国民の統合」の神聖なシンボルであり続けている。

さらに近年、戦争の記憶を語りなおす動きが活発化している。すべての戦没兵士の記録のデータベースがインターネット空間に構築され、遺骨収集団が旧ソ連領に毎夏派遣されて新たな墓地が整備され、国内各地に大規模な戦争記念碑が建てられ戦争を追体験できる施設が整備され、退役軍人が学校を訪問して戦争を語る試みが公的な援助を受けて行われている。過去 100 年間、フィンランドという国民国家の危機は常にロシア/ソ連の明白な脅威とともに到来した。しかし現在の危機は「ヨーロッパ統合」や「グローバル化」と呼ばれ、実体の分かりにくい形で日常の生活を覆いつくそうとしている。だからこそ日常の中に埋没しつつある戦争を周囲から差別化しつつ、戦争の記憶を「記念碑」という形で顕在化させ、それを国中に遍在させる努力が行われているのではないだろうか。